



ビッグデータと観察力

国民一人ひとりが持つ12桁の番号「マイナンバー」の通知カードがいよいよ10月から送られてきます。来年1月からは社会保障・税・災害対策などの行政手続きで利用が始まります。いろいろ便利になると予想されますが、徹底した個人情報保護が望まれます。

このマイナンバー制度とともに最近ビッグデータという言葉もよく耳にするのではないのでしょうか。今までは扱うことのできなかった巨大で複雑なデータの集合のことをこう呼んでいます。例えばネットで本を購入したことがあると、次にサイトを開いたときには「関連したこんな本がおすすめ」というようなガイドがされたりします。このように個々の購買データを蓄積するビジネス利用の他に教育ビッグデータということも注目を集めています。東大大学院の山内祐平教授は、その活用により教育に様々な知見をもたらす可能性を述べています。例えば問題Aにつまずいている子どもは問題Bの正答率も低いというパターンがいくつも出てくると、そこがつまずきの原因だと識別できる。しかし、学習の問題点が分かることと、それを生かして成績を上げることは別次元の話。データを集めたら魔法のような教育法が出てくるわけではないと釘をさしてもいます。

日頃塾生たちに接していると、まさにここがポイントだと実感します。この塾では毎年、夏期講習の中3数学の最初の授業で全員に基礎数学50問テスト（毎年同じ問題）を実施し、その正答率のデータを取り続けています。入試の数学でつまずきやすい点がここからはっきりと浮かびあがるのですが、それを成績向上に結びつけるのは一人ひとりへの対応次第です。全員がほぼ共通で間違いやすい問題もあれば「この生徒は、この分野だけが何かの理由で抜け落ちていたのかもしれない」という固有の原因からくる間違いもあります。ではそれにどう対応するか。これはもう塾生それぞれを日頃から観察していくしかありません。さらにどの問題からつぶしていくかの優先順位のつけかたもそれぞれ異なります。今年の夏も一人ひとりの顔を思い浮かべながら対策を練る日々が続きそうです。